

大学新入生の持つ心理学知識

- 人間科学部人間科学科新入生と理工学部新入生との比較 -

丹治哲雄・山下雅子・木島恒一・飯澤未来

(文教大学人間科学部)

Misconceptions about Modern Psychology among First-year University Students in Human Science : A Comparison between the Faculty of Human Science and that of Science and Technology

TAJIMI TETSUO, YAMASHITA MASAKO,

KIJIMA TSUNEKAZU, IIZAWA MIKI

(Faculty of Human Science, Bunkyo University)

要旨

本学人間科学部新入生の心理学知識が彼らの志向学問分野と関係しているのかを検討するため、他大学理工学部新入生の結果と心理学クイズの結果を分析、比較した。その結果、人間科学部新入生の心理学知識は理工学部新入生よりはやや正確ではあったが、誤った心理学的信念を多く抱いていること、両者間に顕著な違いはなく、異なる学問への志向性の違いよりは世間の誤った心理学知識の影響を共に強く受けていることが示された。

緒言

著者らのうち丹治、山下、木島は、幾つかの大学で新入生を対象とする「心理学概論」「教養科目・心理学」などの講義を担当している。こうした講義では、初めて学問としての「心理学」に触れる受講生が圧倒的多数を占める。著者らは、こうした受講生たちに「心理学」の講義に対する興味関心を抱いてもらい、授業参加の動機づけを高めることを第一の目的として、第一回目の講義冒頭に、日常一般的な知識とは異なる心理学的内容を述べた40の短文が正しいか()誤っているか(×)を問うクイズを実施している。この

クイズは40問すべてが誤り(×)になるように構成されており、我々はこのクイズを『『常識』心理学クイズ』と呼称している。クイズ実施の主目的は前述の通りであるが、クイズの結果は、大雑把ではあっても、正規の心理学教育を受ける前の大学生たちが現代心理学に関する知識をどの程度正しく有しているのかを推測する資料にすることもできる。

著者らは、本学人間科学部人間科学科新入生の持つ心理学知識の特徴を概観することを目的に、2003年度人間科学部人間科学科新入生と、学歴や年齢の高い社会人中心の通信制A大学学生の結果の比較を試みてみた(丹治・

木島・山下・飯澤, 2003)。その結果、人間科学部人間科学科新入生では、クイズ40項目中の17項目で50%以上の学生が誤答を示したり、また、70%以上の学生が誤答だった項目が9項目もあるなど、多くの誤った心理学的な信念を抱いていることが明らかになった。また、平均得点結果をみると人間科学部新入生では通信制A大学学生のそれよりもかなり低めの得点であったが(100点満点換算:人間科学部新入生=52.7点:A通信制大学学生=64.0点)人間科学部新入生の誤った心理学的な信念は、彼らがこれから大学で受ける心理学教育や、彼らの今後の経験によって十分補正されていく可能性があることなども示唆される結果が得られた。

今回は、2004年度の4月に本学人間科学部人間科学科新入生に対して行われた「『常識』心理学クイズ」の結果について、同時期に実施した他大学理工学部新入生の結果と比較し報告する。本学部人間科学科は、人文科学系の学科であり、今回比較の対象とした他大学理工学部諸学科は自然科学系・工学系の学科がその中心を占める。こうした人文科学志向の大学新入生と、自然科学や工学を志向する大学新入生の間に、心理学に関する知識に違いが見られるのかどうか、そうした比較検討を通じて、人間科学科新入生の持つ心理学知識の特徴をさらに探ってみることとした。

方法

1. 「常識」心理学クイズの構成

この「常識」心理学クイズは、心理学に関連する40の短文から構成されており、それらの短文の正誤を×で問う形式になっている(正解はすべて×)。各短文の作成経過については前報(丹治他, 2003)に記した。このクイズ実施の主目的は、緒言でも述べたように、新入生たちにこれから始まる「心理学」の講義に興味関心を抱いてもらい、この講義への参加の動機づけを高めるところにある。その

ため、ここで使用している40の短文の中には、その表現に厳密さを欠くものも含まれており、また、厳密にみれば論争中のテーマも含まれている。また、40の短文はすべての心理学領域をカバーしておらず、また短文の数は各領域で必ずしも同数ではなく、数に偏りがあることなどは前報でも報告した。使用している短文40問全文は本論文中の結果の表2に示した。

2. 対象者及び実施時期

(1) 文教大学人間科学部人間科学科新入生

このテストの対象者のうち、文教大学人間科学部人間科学科新入生(以下「人間科学部新入生」と略記)の場合は、2004年度春学期半期の人間科学部開設科目「心理学概論(丹治担当)」の第一回目講義に出席した受講生246名のうち、新入生である1年生228名である。性別内訳は男子学生84名女子学生144名で、平均年齢は18.24歳(標準偏差=0.49)であった。また、本調査の実施日は2004年4月15日であった。

(2) N大学理工学部新入生

対象者は、N大学理工学部新入生(以下「理工学部新入生」と略記)の男子学生109名女子学生8名の計117名で、平均年齢は18.45歳(標準偏差=0.74)であった。著者の一人である山下が担当する「心理学」の受講生であり、本クイズの実施日は2004年4月27日であった。今回対象にした理工学部新入生の学科専攻は、土木工学科、社会交通工学科、建築学科、海洋建築工学科、機械工学科、精密機械工学科、航空宇宙工学科、電気工学科、電子情報工学科、物質応用化学科、物理学科、数学科の12学科であった。

3. 手続き

(1) 人間科学部新入生

人間科学部新入生の場合は、第一回目の講義を始める前に短文の印刷された用紙を受講生全員に配布し、その後、丹治が一項目ずつ読み上げ、一斉に受講生が○か×で解答するスタイルをとった。全40問解答終了後、その

場で受講生たちに正解を告げ、40問の項目のうち任意の何項目かについての解説を行った。それが終わると、解答済みテストを回収し、その後個別に点数をつけて数週間後の授業時に全体結果とともに各受講生に返却した。

(2) N大学理工学部新入生

理工学部新入生の場合は、ガイダンス後の第1回目の授業の始めに解答用紙を配布して行った。なおクイズ配布前に、このクイズの得点は成績に反映されないこと、また授業開始前なので出来なくても当然であり、現在の知識で自由に答えてかまわないことを説明した。クイズは各受講生が自身のペースで解答を行った。全員が解答し終わった後、鉛筆を置いてもらい、その状態で全部×であることを告げ、説明を授業中に適宜行うことを告げて解答用紙の回収を行った。解答用紙は後日点数をつけて各受講生に返却した。

4. 結果処理法

- (1) まず、2004年度人間科学部新入生の間に、現代心理学に関する正しい知識がどの程度浸透しているかを概観するために、各個人の正答数を求め、受講生全体の得点分布および平均得点(100点満点換算)を求めた。また、比較のためにN大学理工学部新入生の場合も同様の処理を行った。
- (2) 次に、両新入生たちの間に正しく(あるいは誤って)浸透している心理学知識はどのような内容なのかを検討するために、短文1項目ずつの全体誤答率を求めた。両新入生間で比較を行い、また、誤答率の高かった項目の内容について検討などを行った。
- (3) 両新入生の正答傾向・誤答傾向の異同を検討するために、両新入生の各項目の誤答率をもとにSpearmanの順位相関係数を算出した。
- (4) 両新入生間で、心理学領域の違いによって心理学知識に違いがみられるかどうかを検討するために、12の心理学領域別に両新入生の平均誤答数を求め比較した。

. 結果

1. 人間科学部新入生と理工学部新入生の平均得点比較結果

表1に、文教大学人間科学部新入生とN大学理工学部新入生の得点の基礎統計量を示した。短文は40項目であったが、表1では100点満点換算で示した。

表1. 人間科学部新入生と理工学部新入生の得点分布および基礎統計値

得点範囲 (100点満点)	人間科学部 (228名) 比率%(実人数)	理工学部 (117名) 比率%(実人数)
0-9	0.0(0名)	0.0(0名)
10-19	0.0(0名)	0.0(0名)
20-29	0.0(0名)	0.0(0名)
30-39	3.1(7名)	4.3(5名)
40-49	18.0(41名)	23.9(28名)
50-59	33.3(76名)	43.6(51名)
60-69	30.3(69名)	17.1(20名)
70-79	11.8(27名)	8.5(10名)
80-89	2.6(6名)	1.7(2名)
90-99	0.8(2名)	0.9(1名)
100	0.0(0名)	0.0(0名)
平均点	50.4点	47.2点
標準偏差	10.7点	10.6点
最高得点	90点	83点
最低得点	25点	25点
平均正答数	20.2問	18.9問

人間科学部新入生の結果をみると、40問の設問に対してほぼ半数の設問に正答を示すにとどまり、平均得点は100点満点換算点で50.4点であった。この得点は、N大学理工学部新入生の平均得点の47.2点に比べやや高めの得点であった。両群の平均得点間でt検定を行って見たところ両群間で有意な得点差を確認できたが($t=2.663, df=343, p<0.01$)、平均得点差は僅かなものであった。

2. 人間科学部新生と理工学部新生の項目別誤答率結果

表2に、人間科学部新生の誤答率(誤答人数)を誤答率の高かった短文順に示した。また、同短文に対するN大学理工学部新生の誤答率(誤答人数)を並列で示した。表中短文末の【**】は、短文内容が含まれる心理学領域を示している。表中の実線は、人間科学部新生の誤答率の高かった上位10項目および誤答率の低かった下位10項目の境界を示す。

(1) 人間科学部新生と理工学部新生の40項目解答傾向の異同

まず、表2に示す人間科学部新生と理工学部新生の、短文40項目それぞれに対する

表2. 人間科学部新生と理工学部新生の各短文に対する誤答率(誤答人数)の比較

項目番号	質 問 短 文	人間科学部 (228名)	理工学部 (117名)	² 値	有意性
(33)	子供は大人よりずっと容易に暗記することができる。 【記憶】	86.8% (198名)	90.6% (106名)	1.04	ns
(37)	睡眠は人間の生存に必要な不可欠のものであり、一日20分程度の睡眠で何ヵ月も生活することは不可能である。 【生理心理】	86.0% (196名)	89.7% (105名)	0.99	ns
(13)	天才と狂気は紙一重である。 【性格・知能】	85.1% (194名)	81.2% (95名)	0.86	ns
(27)	人が夜8時間眠ったとすると、その時間の2/3ほどは夢を見ているが、朝目覚めると同時に一部の内容を残してそのほとんどを忘れてしまう。 【生理心理】	83.3% (190名)	88.0% (103名)	1.33	ns
(06)	目の見えない人は、目のみえる人とは異なった鋭敏な触感覚を持っている。 【感覚・知覚】	81.1% (185名)	88.9% (104名)	3.41	*
(12)	記憶は脳内の貯蔵庫になぞらえられる。我々は資料をその中に蓄え、そして必要な時にそこから引き出すことができる。場合によってはその『金庫』から何かが紛失することがあり、それが忘却である。 【記憶】	79.8% (182名)	71.8% (84名)	2.82	*
(31)	臨床心理学者として開業するためには、日本では厚生労働省の実施する国家試験に合格しなければならない。 【臨床心理】	78.9% (180名)	84.6% (99名)	1.60	ns
(04)	赤ん坊にとって幸福なことに、人間の女性は元来強い母性本能を持っている。 【発達心理】	78.1% (178名)	78.6% (92名)	0.01	ns

誤答傾向の異同を、Spearmanの順位相関係数を用いて検討した。その結果、両群の誤答率の順位間には、 $r_s = 0.911 (p < 0.05)$ という高い相関が認められた。両学部学生の中に浸透している心理学知識は、異なる学部新生間で特に大きな相違があるわけではなく、ほぼ同じような項目でほぼ同じような誤答傾向にあることが確認できた。

(2) 人間科学部新生と理工学部新生の40項目別誤答率の比較

次に、各短文に対する両群の誤答率の違いを検討するために、両群の誤答率間で²検定を行った。各項目誤答率間の²値および有意性を表2の右側2列に示した。

項目番号	質 問 短 文	人間科学部(228名)	理工学部(117名)	² 値	有意性
(21)	罪もない人に『450Vの電気ショック(100Vで人が死ぬことがある)を送れ』という命令には、多くのひとは従わないであろう。 【社会心理】	77.6% (177名)	82.1% (96名)	0.91	ns
(39)	子供の知能指数と学業成績とはほとんど相関しない。 【性格・知能】	76.8% (175名)	71.8% (84名)	1.01	ns
(25)	催眠下では、それまで決してできなかったような力技(ちからわざ)を行うことができる。 【臨床心理】	70.2% (160名)	63.2% (74名)	1.70	ns
(26)	訓練された精神科医や心理学者は、正常な人間が精神病患者を装っても数回の面接を行えばそれを簡単に見破ってしまう。 【臨床心理】	70.2% (160名)	84.6% (99名)	8.61	**
(23)	単純でつまらないアルバイトをした後、高いバイト料を貰った人のほうが、安いバイト料を貰った人よりもその作業を高く評価する。 【社会心理】	62.7% (143名)	70.9% (83名)	2.31	ns
(24)	精神科医は精神分析を用いる医師として規定されている。 【臨床心理】	61.4% (140名)	63.2% (74名)	0.11	ns
(40)	幻覚や夢、あるいは病的な状態にある場合をのぞいて、正常な心理状態下では物理的に存在しないものは眼には見えない。 【感覚・知覚】	58.3% (133名)	62.4% (73名)	0.52	ns
(03)	『心の研究』という言葉は、心理学を定義した最も良い短い定義である。 【心理学全般】	55.7% (127名)	51.3% (60名)	0.60	ns
(30)	教師の生徒に対する期待と、その生徒の学力とは無関係である。 【教育心理】	52.6% (120名)	25.6% (30名)	22.92	**
(15)	より強く動機づけられるほど、複雑な問題を巧みに解決できるだろう。 【動機づけ】	52.2% (119名)	69.2% (81名)	9.21	**
(01)	生理学者は肉体を研究する。心理学者は心を研究する。 【心理学全般】	49.6% (113名)	60.7% (71名)	3.84	*
(34)	個人である決定を下すよりは、集団で討議して決定を下すほうが、過激な結論になりにくい。 【社会心理】	49.6% (113名)	64.1% (75名)	6.59	*
(11)	人間の脳の記憶情報の貯蔵量は、約五千万項目程度と言われている。 【記憶】	43.4% (99名)	45.3% (53名)	0.11	ns
(10)	心理学とは、フロイトの創始した精神分析学とほぼおなじものである。 【心理学全般】	43.0% (98名)	39.3% (46名)	0.42	ns
(07)	人間の視知覚機能は、光学機械などとは比べようもなく精緻であることが実験的に明らかにされており、可視範囲であれば極めて正確に外界をとらえることができる。 【感覚・知覚】	42.5% (97名)	45.3% (53名)	0.23	ns

項目番号	質 問 短 文	人間科学部(228名)	理工学部(117名)	² 値	有意性
(20)	何か助けが必要なとき、周囲に一人しか他人がいない場合よりも、沢山の他人がいたほうが援助される可能性は高くなる。 【社会心理】	42.1% (96名)	39.3% (46名)	0.24	ns
(35)	最近の睡眠科学の進歩は目覚ましく、睡眠中に測定される脳波や他の生理反応を分析することによって、夢の内容のかなりの部分がわかるようになってきている。 【生理心理】	39.9% (91名)	47.0% (55名)	1.59	ns
(16)	血液型(A・B・AB・O)と性格の間にはある種の関連があり、このことは心理学的に実証されたと言ってよい。 【性格・知能】	39.0% (89名)	53.8% (63名)	6.88	**
(18)	平均的な赤ん坊に適切な訓練を行えば、普通より2か月はやく歩けるようになる。 【発達心理】	38.6% (88名)	45.3% (53名)	1.43	**
(36)	上下が逆に見えるメガネを長期間かけ続けても、我々が知覚する外界は逆転したままであるが、日常行動は逆転メガネをかける前とほぼ同じ程度にスムーズになる。 【感覚・知覚】	35.1% (80名)	40.2% (47名)	0.85	ns
(02)	心理学は一つに体系化された科学である。 【心理学全般】	34.6% (79名)	48.7% (57名)	6.40	*
(38)	人の大脳は右脳と左脳に分かれてある程度の機能分担をしているが、片方の脳だけ起きていて、もう片方の脳は眠ってしまうなどということはあり得ない。 【生理心理】	34.2% (78名)	36.8% (43名)	0.21	ns
(05)	多分、人間の闘争本能が戦争の根本的な原因なのであろう。 【社会心理】	33.8% (77名)	36.8% (43名)	0.30	ns
(28)	念動(サイコキネーシス)や未来予知に関してはまだ不明の部分があるが、テレパシーに関しては程度の差はあれ、人間に生物学的に備わっている能力であり、訓練次第でその能力を伸ばすことができることが科学的に明らかにされている。 【超心理】	31.6% (72名)	25.6% (30名)	1.30	ns
(29)	睡眠中に生じる『金縛り現象』は、心理学では超常現象のひとつとして研究されている。 【超心理】	30.7% (70名)	33.3% (39名)	0.24	ns
(19)	統合失調症(精神分裂病)とは性格の分裂した人のことをいう。 【臨床心理】	26.3% (60名)	30.8% (36名)	0.36	ns
(09)	子供に何かを学ばせる場合、できた時に報酬を与えることと、できなかった時に罰を与えることは、子供の学習に同じくらいの効果がある。 【学習心理】	25.0% (57名)	36.8% (43名)	5.18	*
(22)	我々はある事柄に対してまず『意見』を持ち、次に『態度』を形成し、それに従って『行動』するのが普通であり、その逆は通常あり得ない。 【社会心理】	15.8% (36名)	28.2% (33名)	7.44	**

項目番号	質 問 短 文	人間科学部(228名)	理工学部(117名)	² 値	有意性
(17)	子供は善悪の感覚を持って生まれてくる。 【発達心理】	12.3% (23名)	10.3% (12名)	0.30	ns
(08)	現実の場面ではなく、テレビなどで凶暴なシーンを見るだけでは、子供に余り悪い影響を与えない。 【学習心理】	10.5% (24名)	19.7% (23名)	5.47	**
(14)	知能検査は人間の知能を正確にはかることができる。 【性格・知能】	5.7% (13名)	7.7% (9名)	0.51	ns
(32)	心理学を学ぶと他人の心が容易に分かるようになる。 【心理学全般】	3.1% (7名)	3.4% (4名)	0.03	ns

**p<0.01, *p<0.05 : df=1

40項目中13項目で両群の誤答率に有意な違いが認められた。また、有意差が認められた13項目中11項目では人間科学部新入生の方が理工学部新入生よりも低い誤答率を示していた。

(3) 人間科学部新入生と理工学部新入生の領域別平均誤答数の比較

表3に、心理学各領域別項目群の両学部の平均誤答数(標準偏差)およびt検定の結果を示した。

表3 . 心理学各領域項目群の両学部の平均誤答数(標準偏差)およびt検定結果

心理学領域 (項目数)	人間科学部 理工学部 新入生 新入生 (228名) (117名)		t値	有意性
	平均誤答数 (標準偏差)	平均誤答数 (標準偏差)		
心理学全般 (5項目)	1.68(1.15)	2.03(1.16)	1.329	+
感覚・知覚 (4項目)	2.17(0.94)	2.37(0.93)	1.837	+
生理心理 (4項目)	2.43(0.84)	2.62(0.87)	1.875	+
記憶 (3項目)	2.10(0.71)	2.08(0.76)	0.290	ns
学習心理 (2項目)	0.36(0.57)	0.56(0.62)	3.118	**
動機づけ (1項目)	0.52(0.50)	0.69(0.46)	3.068	**
性格・知能 (4項目)	2.07(0.75)	2.15(0.80)	0.910	ns
発達心理 (3項目)	1.29(0.67)	1.34(0.71)	0.672	ns
臨床心理 (5項目)	3.07(1.14)	3.26(1.17)	1.493	ns
社会心理 (6項目)	3.48(1.15)	3.21(1.22)	1.981	*
教育心理 (1項目)	0.53(0.50)	0.26(0.44)	4.941	**
超心理 (2項目)	0.62(0.68)	0.59(0.71)	0.421	ns

**p<0.01, *p<0.05, +p<0.10 : df=343

12の心理学領域のうち、5領域ではその平均誤答数に有意な違いは見られなかったが、4領域で有意差が、また3領域で有意差傾向が認められた。有意差および有意差傾向が認められた7領域では、社会心理領域と教育心理領域の2領域で人間科学部新入生の方が理工学部新入生よりも平均誤答数が多かったが、他の5領域ではいずれも理工学部新入生の方が平均誤答数が多い、あるいは多い傾向が見られた。

. 考 察

1. 2004年度人間科学部新入生の心理学知識：2003年度結果との比較

2004年度人間科学部人間科学科新入生の平均得点は100点満点換算で50.4点であり、必ずしも高い得点とは言えず、現代心理学について誤った知識・信念を持つ新入生が多いことが伺えた。今回の2004年度新入生の平均得点は、前報告(丹治・木島・山下・飯澤, 2003)

2003年度の52.7点にくらべ有意に低い平均得点であったが(t=2.341, df=477, p<0.05)その差は顕著なものではなかった。また、本報告2004年度の上位10項目中8項目は、前報告2003年度で誤答率の高かった10項目中にも共通して含まれていた項目であった。また、40項目中の18項目で50%以上の学生が誤答を示していた(2003年度では17項目)。さらに、

2003年度受講生と今回の2004年度受講生たちの40項目それぞれに対する誤答率を用いてSpearmanの順位相関係数を求めたところ、両年度受講生群の間には、 $r_s=0.920$ ($p<0.05$)という高い相関が認められた。これらのことは、新入生の誤った心理学知識の傾向は、2003年度・2004年度の間科学部新入生間で特に大きな相違があった訳ではなく、ほぼ同じような項目、同じような心理学領域で同じような誤解傾向（正解傾向）であったと言える。とりわけ誤答率の高かった項目は、前報と同様に「科学的ではない通俗的な表現で記述された短文であり、また、内容的にも分かりやすく世間受けのする誤った心理学の信念を導きやすい短文群」と言ってよいであろう。

2. 人間科学部新入生と理工学部新入生との比較：前報A大学社会人学生との結果比較と併せて

次に、今回比較の対象とした他大学理工学部新入生との異同について見てみたい。平均得点でみると、人文科学志向の人間科学部新入生の方が、自然科学・工学志向の理工学部新入生よりも有意に高い平均得点を示していた。また、40項目毎の誤答率を比較すると、40項目中13項目で両新入生間に有意な差がみられ、その13項目のうち11項目は人間科学部新入生の方が低い誤答率を示していた。さらに心理学12領域別の平均誤答数の比較でも、有意差および有意差傾向が認められた7領域のうち5領域では、いずれも理工学部新入生の方が高い平均誤答数を示した。人間科学部は、心理学を含む人文科学系の学部であり、理工学部は、自然科学・工学系の学部である。新入生が志向する学問領域の違いが、こうした得点差、誤答数差に影響を与えた可能性も十分考えられる。

ただ、前報で報告した人間科学部新入生と社会人中心で学歴や年齢の高い通信制A大学学生との比較結果に比べると、今回見られた違いは、前報ほど顕著なものではなかった。

前報では、平均正答得点で11.3点も通信制A大学学生の方が高かったのに対し、今回は人間科学部新入生の方が理工学部新入生よりも3.2点高かったに過ぎなかった。また、前報の比較では、短文40項目中20項目で誤答率に有意差がみられ、うち18項目で通信制A大学社会人学生の方が低い誤答率を示すという結果が得られている。また、誤答率の高かった上位10項目中9項目で誤答率に有意差が見られたが（9項目中8項目で人間科学部新入生の方が高い誤答率）今回は、誤答率の高かった上位10項目中2項目で両新入生の誤答率に有意差がみられたに過ぎず、そのうち1項目は人間科学部新入生の方が高い誤答率を示していた。これらのことにより、大学新入生の持つ心理学知識は、彼らが志向する学問領域によってある程度の影響は受けるものの、人文科学領域志向の人間科学部新入生であっても、多くの誤った心理学的な信念を抱えていること、彼らの心理学知識は、自然科学・工学志向の理工学部新入生のそれよりもやや正確ではあったが、両新入生間の違いを強調するよりはむしろ、同世代である彼らの持つ心理学教育を受ける前の知識は、学問領域の志向性の違いを越えて、世間一般に浸透している誤った心理学知識の影響を共に強く受けていると考えた方が妥当であるように思われる。

3. 大学新入生の誤った心理学知識の修正

木島・丹治・山下は、法学部・経済学部・外国語学部・工学部で構成される大学キャンパスで、1年生と2年生以上の本クイズの結果を比較し、両学年間の得点に有意な差は見られなかったことを報告している（木島・丹治・山下，2005）。木島らが対象とした大学キャンパスでは、学部構成の関係から上級学年対象の心理学科目は2科目のみ開設されているに過ぎない。そのような教育環境では1年生時の誤った心理学知識が上級学年になっても補正されないまま保持され続ける可能性がある。本学では、学部学科構成の関係から、

心理学および心理学関連科目が極めて豊富に開設されており、本学学生が複数の心理学関係科目を受講する可能性は高い。丹治は、2005年度新入生288名の結果と、このクイズに初めて解答した2年生以上34名の結果を試験的に比較し、新入生よりも2年生以上の学生の得点の方が有意に高い傾向を示したことを報告している(新入生288名;平均得点50.4,標準偏差10.5;2年生以上34名;平均得点53.8,標準偏差11.9($t=1.710, df=320, p<0.1$))(丹治, 2005)。本クイズ40項目の中には、偏見・差別につながりかねない内容の項目も含まれている。ここで見たような大学新入生の持つ心理学の誤った知識や信念が、大学4年間の正規の心理学教育の中で少しでも修正され、学生たちが正しい心理学知識を身につけていくことを願っている。

. 文 献

1) 木島恒一・丹治哲雄・山下雅子(2005).

「心理学」履修前における大学生の心理学知識 日本心理学会第69回大会発表論文集, 1270. (Kijima, T., Tajimi, T., & Yamashita, M.)

2) 丹治哲雄・木島恒一・山下雅子・飯澤未来(2003). 大学新入生の持つ心理学知識 : 人間科学部人間科学科新入生の場合 教育研究所紀要(文教大学付属教育研究所), 12, 85-92.

(Tajimi, T., Kijima, T., Yamashita, M., & Iizawa, M. (2003). Misconceptions about modern psychology among first-year university students in human science . *Bulletin of Institute of Educational Research (Bunkyo University Institute of Educational Research)*, 12, 85-92.

3) 丹治哲雄(2005). 「常識」心理学テスト結果 2005年度文教大学越谷キャンパス春学期共通教養科目・心理学(丹治担当)学内授業用配布資料, No.08. (Tajimi, T.)